

〔「風俗画と物語絵」展によせて〕

岩佐派「源氏物語図屏風」の二作品について

『源氏物語』は物語の成立以来、常に絵画に描き継がれてきました。武家の世になって久しい桃山時代、江戸時代にも数多くの作品が残されています。王朝風俗を描くには、装束、建物、調度品、儀式や儀礼などに関する知識が必要です。登場人物の性格や心情まで表現しようとするれば、有職故実や歌学に精通した公家の指導が求められます。室町時代には、王朝風俗を描く作品は土佐派の絵師を中心に制作されました。土佐派を確立した土佐光信は文明元年（1469）に宮廷の絵所預となり、文亀三年（1503）に従四位下に叙位されています。絵所預の職は光信の後、光茂、光元と土佐派の宗家が世襲しましたが、永禄十二年（1569）に光元が戦没し、宗家の血脈は途絶えました。その後、弟子筋の光起が復職するの承応3年（1654）です。桃山時代から江戸時代前期にかけて八十五年間、絵所預はいませんでした。

土佐派の絵師たちは他の画派に属し、あるいは、町絵師として活躍することで、土佐派に蓄積された古画の資料や、細密な描写や華麗な彩色などの伝統的な画技が他の画派に伝えられたと思われます。源氏物語図の画題は土

佐派から開放され、再興された土佐派、土佐派から分かれた住吉派だけでなく、狩野派、宗達派、岩佐派など、多くの画派によって描かれました。これらの画派に土佐派の影響が多分に認められる中で、強い現実感を示す岩佐派の作品は特筆されます。土佐派の理想化された典雅な趣の漂う作品とは対照的な画風です。画中の人物は顔が小さく、堂々とした体格をしており、大きな仕草で、強い視線を向けています。岩佐派の創始者は岩佐又兵衛です。又兵衛は風俗画の新様式を確立した絵師として知られます。風俗画には、描かれた光景に立ち会うような臨場感が求められます。岩佐派の源氏物語図の演劇的とも言える強い現実感には、風俗画の制作で修得した人物表現が反映されているでしょう。

岩佐派の源氏物語図には、数点の屏風作品があります。いずれも、落款や印章はありませんが、画風から岩佐派の作品と考えられています。これらの屏風作品には、大きく分ければ、三つの画面形式が認められます。「源氏物語総角図屏風」（細見美術館蔵）のように、屏風に一場面だけを大きく描く作品、押絵貼屏風、すなわち、屏風

の各扇に一場面ずつ貼り込んだ作品、屏風の画面を金雲や建物、樹木によって分節し、数場面を描く作品です。大和文華館の所蔵する「源氏物語図屏風」は最後の画面形式の作品です。岩佐派の同じ画面形式の屏風作品でも、絵画表現は微妙に異なります。大和文華館作品に最も近い作品は、個人に所蔵される「源氏物語図屏風」（図1）です。ただし、この屏風は六曲一双の本間屏風ですが、大和文華館の作品は六曲一隻の中屏風です。縦の寸法は大和文華館作品が96.5cmに対して、個人蔵作品が158.0cmであり、大和文華館作品の約1.5倍の大きさがあります。

まず、二作品の共通点に上げられるのは画面構成です。ともに、金雲を長く横に伸ばして画面を上下に分け、上段に三場面、下段に三場면을配しています。各場面は独立していますが、遠景にあたる上段が少し狭く、上段と下段の家屋の傾きを斜めに合わせて、画面全体の自然な遠近感が保たれるように整えています。

個人蔵作品に描かれる場面は、右隻の上段に右から「桐壺」「帚木」「絵合」、下段に「末摘花」「瀟標」「松風」、左隻の上段に「玉鬘」「若菜下」「竹河」、下段に「藤裏葉」「若菜上」「浮舟」の十二場面です。大和文華館作品では、上段が「若紫」「蓬生」「瀟標」、下段が「明石」「絵合」、

「若菜上」の六場面であり、個人蔵作品と「瀟標」「絵合」「若菜上」の三場面が共通しています。ともに場面の選択や配置に物語の進行や季節に応じた規則性は認められず、屋外や華やかな催事の場面が多く選ばれています。

人物の表現にも共通点が見出せます。例えば、「絵合」の場面の袖で口を押さえ、童子に何かを告げる官女の姿（図2、図3）、「瀟標」の場面の源氏に筆と硯を差し出す惟光の姿が上げられます。大和文華館作品の「明石」の源氏と個人蔵作品の「竹河」の蔵人少将（図4、図5）、大和文華館作品の「蓬生」の源氏に端折笠をさしかける従者と個人蔵作品の「瀟標」の従者の顔の表現（図6、図7）も同様です。

若干の相違点も認められます。大和文華館作品では、人物がやや細面であり、衣紋線が個人蔵作品ほど直線的ではなく、量感表現にも弾力を含んだ柔軟さが感じられます。しかし、大和文華館作品と個人蔵作品の大きさの相違を考慮すれば、むしろ、これほどの共通性が認められることを重視すべきでしょう。二作品は同じ制作背景をもつ非常に近い関係にあると考えられます。

通常、屏風作品は一人の絵師の指導のもとで、数人の絵師の分業によって制作されます。いわば工房制作であり、作品に示された様式は工房様式です。それでも、指導的な立場にある絵師個人の様式は強く作品に表れます。現在、残された作品では、大和文華館作品と個人蔵作品は、岩佐又兵衛の主宰する工房において、ほぼ同時期に制作された作品と考えられます。人物表現の多様性から、未だ典型的な又兵衛様式が確立する以前の作品である可能性も残されています。（中部義隆）

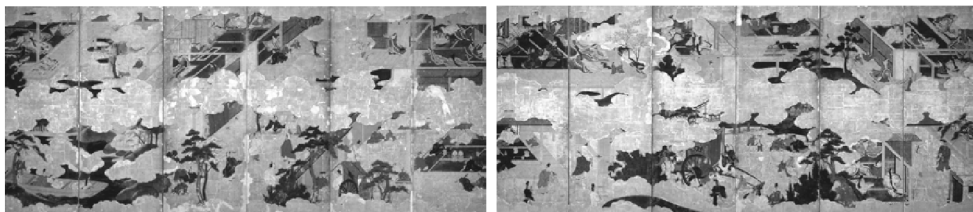


図1 「源氏物語図屏風」 個人蔵



図2 大和文華館作品



図3 個人蔵作品



図4 大和文華館作品



図5 個人蔵作品



図6 大和文華館作品



図7 個人蔵作品